

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
^{みやぎ} 宮城 ^{よしかず} 良和	男 性	7 8 歳	1 3 歳	八名井

県立豊橋第二中学校1年生（旧制）

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

学校にいたが、^{てんのうへい か}天皇陛下のラジオ放送を聞くように言われ、昼少し前に帰った。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

学校から帰る途中、^{と ちゆう}友達の家で玉音放送を聞いたがよく分からず、その後、
上級生や家の人に聞いて初めて分かった。^{くうしゆう}空襲もなく、静かな日だった。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

えらいことになったと思った。まだ子どもなので、どうしたらよいかとは考えられなかった。前から鬼畜米英と言われ、男は皆殺しになるだろうと聞いていたので、大変なことになると胸騒ぎがした。だが、田舎だし、村には女、子ども、老人しかいないので静かだった。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「戦争で失ったもの」

中学2年生以上は、男女とも学徒動員で豊川海軍工廠^{こうしやう}へ行き、大ぜい死んだ。今思えば孫の年齢^{ねんれい}で、痛々しい。私は1年若かった^{わか}ので、死なずに生きのびた。しかし、兄が戦死したので、年老いた父と祖母の3人暮らしとなり、家や土地を守るため、三男であつたが進学をあきらめ、家を継いだ。若い息子を亡くした親、夫を亡くした若妻^{わかつま}、顔も見れずに死別した父と子、その他、戦争のために人生が狂い、多くの人が苦しく悲しい生活をせざるを得なくなった。

戦争中は、わら人形を竹やりで刺す訓練^さをしたり、大声で号令をかけながら隊列行進をする軍事教練^{しよくりよう}をしたりした。食糧不足で運動場に麦やイモを作ったり、勉強中でも空襲で防空壕へ逃げ込んだりと、勉強どころではなかった。都会の子は田舎の学校へ疎開し、親と離れて暮らした。服がなく、縫いつくろったぼろ服を着、靴がなく、わらぞうりや下駄を履いて通学した。夜は灯火管制で、灯りが外へもれないようにして勉強した。

空襲は、直接受けなかった^{こわ}ので、怖い思い出は少ないが、豊橋で機銃掃射を受けた時の怖さは忘れることができない。「バリバリッ」と、弾の音が近づいた時は、生きた心地がしなかった。

このような悲劇^{ひげき}を絶対に繰り返さないようにしなければなりません。



▲昭和25年頃の豊川海軍工廠（写真集 愛知百年より）

学校教育の崩壊

参考：新城地方教育百年史

昭和20年3月になると、閣議決定による「決戦教育措置要綱」によって、国民学校初等科以外は、原則として授業停止となった。さらに5月、本土決戦に備えて出された「戦時教育令」によって、教育は機能を停止し、完全に崩壊した。昭和20年6月の八楽地方校長会で、教学課長は管内の校長たちに次のように指示した。ここには、教育を犠牲にし、戦力維持のための生産増強に学校を取りこむ政府の方針が表れている。

決戦教育遂行に関する件

- 戦局を認識せよ
- 戦時教育をしっかりと味え
～ 職員率先垂範
- 疎開学童教育令も味え
- 教育手段としての生産増強にあらず
- 教育の内容は、国家の状況により変化する
- 生産増強が教育の内容でなくてはならぬ時である
- 教育的にマイナスでも、生産的ならやってもらいたい
- 独断決行で結構



清水野国民学校に併設された青年訓練所主催
の剣道・銃剣術大会（昭和のはじめ頃）

6月20日、八楽地方の学徒隊編成に関する打ち合わせ会がもたれ、国民学校、青年学校が一斉に、学校ごとに学徒隊の結成式を挙行了した。学徒隊は、学年、学級を単位として、学校ごとに編成された。（P-134-学校日誌参照）

一方、空襲からのがれるため、工場の疎開が行われ、新城国民学校、新城高等女学校などが豊川海軍工廠の疎開工場となった。また、各学校は本土決戦に備えて、兵舎や病院として強制使用された。校地、校舎は使えなくなり、毎日、勤労作業に従事せざるを得なくなった。

富岡国民学校

講堂が兵舎になった。風呂はドラムカンを使用したり、時々近くの農家にもらいに行った。その時、上官たちにはいしょで兵隊たちに食事を出した。校舎のほとんどが兵舎となり、教室は柔道場、寄宿舎の一部を改造して、4教室くらいしかなかったように思うし、また、これらの教室を使用して勉強した記憶はほとんどない。当時、学校は鋭敏部隊の本部になっており、校内で見かけるのはほとんど将校たちだった。

清水野国民学校

馬の食糧である干し草を積んだ倉庫になって、山ほど天井まで干し草が詰められていた。兵隊も少しいて、すごくせまくなる感じがした。